

清代甘肅地域における生態環境関連檔案の 抽出、整理及びその研究価値の評価

張 玉（中国第一歴史檔案館）

中国甘肅省張掖河（又は黒河）流域の整体環境問題は、総合地球環境学研究所の重点研究課題の一つである。2002年7月、中国第一歴史檔案館と総合地球環境学研究所とは「清代甘肅地域の生態環境に関する檔案史料を共同開発することに関する合意書」を締結した。そして、2003年2月28日に中国第一歴史檔案館が該研究所に清代甘肅地域の生態環境関連檔案のマイクロフィルムを一部提供することを計画した。この作業を順調に完成させるため、中国第一歴史檔案館は特別チームを結成し、詳細な文献調査研究の基礎の上に、作業の手配を行い、今までに中間的な成果を得た。今、作業状況を下記の通り報告する。

一、清代甘肅地域生態環境関連檔案の抽出整理

1. 作業人員の構成及び分業

共同作業の順調な進行を確保するため、中国第一歴史檔案館は檔案の整理・編目作業を受け持つ職能ある部門（満文部と整編部）から6人を選出してチームを結成した。該チームの人員構成についてはまた学術水準と知識構成などの要素に十分配慮した。うち2名は研究館員であり、館蔵物に熟達し、編輯能力と組織能力を有している。彼等は文献調査研究を行い、実施方案を作成し、校訂及び日常作業の指導と管理に主に当たった。2名の副研究館員は長期に亘る檔案整理、編目作業に関する経験及び編輯能力を具備している。2名の館員も長期に亘る檔案整理、編目作業に関する経験があり、彼等4人は主に檔案の抽出、整理、編目と編輯の作業に当たった。このほか、檔案館技術部と保管利用部が各1名の専門技術員、保管員を選抜し、マイクロフィルム撮影作業と檔案管理作業に当たり、チームの作業を支援した。

2. 檔案の由来と抽出範囲

中国第一歴史檔案館は清代の中央機関及び少数の地方機関の檔案約1000余万件を所蔵し、それらは74の全宗に分かれている。この膨大な歴史檔案には、繁多な文書の種類があるが、文書の送達方向から上級部門から下級部門に送達される下行文書、下級部門から上級部門に送達される上行文書と同級の部門間で送達される平行文書の三種類におおよそ分けられる。

これらの官公文書のうち、奏摺は清朝高級官員が皇帝に対して政務を報告した文書であり、上行文書に属する。奏摺の使用は康熙朝に始まり、最初は個別の寵臣が奏摺を用いて密報するのを許可するのみであり、密封を直接に御前に届け、物事の処理を機密に且つ迅速に行い、皇帝の絶対的権威を維持するのに役立った。だからこそ、雍正時期、奏摺の使用範囲が徐々に拡大したのである。乾隆以降、百官の奏上には多く奏摺が採用され、それは清代最も重要な官公文書の一種となったのである。奏摺は皇帝が朱砂の紅筆で批閱した後、「朱批奏摺」と呼ばれた。朱批奏摺は奏上した者に返却され聖旨の通りに事を行うものである。雍正帝が即位した後、政治闘争の必要から、「あらゆる先代

皇帝の朱批諭旨」及び「朕（雍正帝）が自ら批した密旨」は「俱に謹んで封をして進呈させる」よう命じた。以後、歴朝は相遵い、朱批奏摺を皇帝に返送することが制度となった。このようにして、康熙から宣統に至るまでの二百年強、宮中には大量の朱批奏摺が保存された。中国第一歴史档案馆宮中全宗の朱批奏摺は約 74 万件で、そのうち漢文朱批奏摺は約 60 万件、満文朱批奏摺は約 14 万件である。

軍機処全宗の録副奏摺は奏摺を報告する過程において作成された抄本であり、録副奏摺が朱批奏摺と比較してさらに価値あるのは、朱批の時間を記録していることにある。録副奏摺は雍正から宣統に至るまで、満文と漢文に分けて保管され、全部で約 90 万件ある。そのうち漢文録副奏摺は約 72 万件で、満文録副奏摺は約 18 万件である。

歴史的要因により、奏摺の毀損状況は非道く、現在存留する朱批奏摺と録副奏摺の数量は膨大であるが、決して完全ではない。二者を相互に補充すれば、内容が比較的体系的な文献体系を形成できる。その内容は清代康熙以降の政治、経済、軍事、文化、外交、民族、辺境と自然現象の各方面を広く覆っている。

こうしたことから、チームは館蔵の朱批奏摺と録副奏摺を抽出の主要文献源とすることを決定し、康熙、雍正両朝の関連文献は主に朱批奏摺から抽出し、乾隆以降各朝の関連文献は録副奏摺から抽出した。

この外、地域の点から考慮すれば、清代甘肅省の行政区画は今の寧夏、青海と新疆の一部地域を含む。よって、清代甘肅地域における生態環境関連の档案史料を抽出する際には清代甘肅省の行政区画を区切りとした。凡そ今の寧夏、青海と新疆の一部地域を含む甘肅地域の生態環境関連の档案は、均しく抽出範囲の内に在るが、内容が僅かに寧夏、青海と新疆地域に及んで、甘肅の主要地域に及ばない档案は、抽出範囲には入らない。

内容の点から考慮すれば、清代甘肅地域における生態環境档案は、以下 5 項目の内容の档案に限定される。

気象：降雨、降雪及び雨、雪、雹、霜、旱害、水害の状況並びにその他の災害の档案史料を含む。

水利：水資源の開発、利用、管理と水害などの档案史料を含む。

農業：開墾、播種と収穫などの档案史料を主に含む。

人口：歴年の人口数値と人口変遷（家族を伴う官兵の移駐と転駐及び流民を含む）などの档案史料を含む。

牧業：草場と牧畜業生産などの档案史料を主に含む。

3. 档案の整理及び編目の原則

各件档案間の本来の繋がりを反映させるために、総合地球環境学研究所と共同して行う今次の清代甘肅地域における生態環境関連の档案史料開発では、朝代—テーマ—時間を勘案して排列を行う原則を採用した。つまり、先に「乾隆朝」、「嘉慶朝」のように朝代年次を分けてから、朝代の中で「気象」、「農業」のようにテーマを分け、同じテーマの档案は再度時間の順序によって排列した。

読者の閲覧に便利ならしめるため、档案の排列が完了してから、文書各件からなる目録を編纂し、下記の項目を設け、多角度、多経路の検索が出来るようにした。

番号：「朝代」毎に整理番号を付した。例えば「乾隆朝」には 1121 件の档案があり、

番号は1～1121号である。

文書標題：標題には奏上者の職官、姓名、档案の内容にある人、事、地、時などの要素及び文書種類を反映させなければならない。文書種類の表示方式はこのようになっている。「奏報甘省四鎮雨水糧価摺」、「摺」は奏摺である。「奏甘州蘭州雨未沾足涼州稍旱片」、「片」は奏片である。「諭令陝甘總督勒爾勤妥辦查災賑恤事」、「諭」は「上諭」である。「奏呈甘省糧価清單」あるいは「附糧価單」は「清單」である。「為……事咨（呈）文」、咨（呈）は「咨（呈）文」である。朱批奏摺はその標題最終字の後に*をつけることで区別することとした。

附件：今次選んだ档案は正本を含むが、また奏摺に付された糧価單、雨雪清單のような付件を含む。奏摺は正本であり、單は付件である。

時間：奏上の時間。

档案番号：中国第一歴史档案馆が整理過程において档案に付した館蔵物の実際の番号である。2種類のアラビア数字から成り、中間は「—」で分けられている。左の数字は案巻号で、右の数字は巻内の文件号である。

フィルム番号：今回日本側に提供したマイクロフィルムの番号である。2種類のアラビア数字から成り、中間は「—」で分けられている。左の数字はリール番号で、右の数字はコマ番号である。

備注。

二、清代甘肅地域における生態環境関連档案の数量及び研究価値の評価

1. 档案の数量

第1期の契約期間（両当事者が締結した合意書と契約の規定では、第1期の共同作業期間は2003年2月28日までである）の内に、2141件の档案が抽出された。気象は1306件、そのうち康熙朝の気象は2件、雍正朝の気象は2件、乾隆朝の気象は439件、嘉慶朝の気象は445件、道光朝の気象は418件であった。水利は112件、そのうち雍正朝の水利は15件、乾隆朝の水利は73件、嘉慶朝の水利は24件であった。農業は455件、そのうち康熙朝の農業は1件、乾隆朝の農業は364件、嘉慶朝の農業は91件であった。人口は200件、そのうち乾隆朝の人口は193件、嘉慶朝の人口は7件であった。牧業は68件、そのうち乾隆朝の牧業は52件、嘉慶朝は16件であった。

契約期間終了と同時に総合地球環境学研究所にマイクロフィルム5リールを交付した。

2. 研究価値の評価

甘肅は中国大陸の中西部に位置し、甘州、肅州両地の1字を採って省名としている。清代甘肅省所属の地域と今日の地域は異なっているが、古来、地理上の原因により、甘肅は中国歴代中央政権が西部辺境地帯の管理、施政を実現し、戦略防衛システムを打ち立てるための重要な中継地であり続けた。またチベット、新疆、中央アジア、西アジアから中東及びヨーロッパにまで貿易を展開するための重要な街道であり続けた。その政治・経済上の地位は極めて重要であった。まさにこのことによって、千百年来、貿易、

戦争、屯田防辺と東西の交通はこの地域において人口・物資の頻繁な流動をもたらした。そして清代甘肅地域における生態環境の変化は、現地の農業、牧業、商業、工業、交通の発展及び戦争など人類の活動と密接不可分な関係にあった。人類の行動がこの地域の自然環境に対してどのような影響をもたらしたのか、ということは、歴史学、環境学の重要なテーマである。ここから、現在存留する甘肅地域の生態環境を反映した史料は非常に貴重であると言えよう。

中国は古来農業大国であり、農業の豊凶は国家財政と国民生活に関係し、国家の安定に関して極めて重要であった。そこで、歴代の統治者は農業生産を非常に重視し、各地の官員は管轄地域の雨雪降水量、農作物の育ち、農業の収穫、糧食の価格などの状況を事実通りに奏上しなければならなかった。かつ、これら数項目の内容はしばしば同時に奏上され、大量の雨雪苗情、雨雪糧価、収穫指数に関する奏摺と清單が作成された。こうした内容の奏上は最も早くは康熙朝に出現し、乾隆初年に制度化・規範化され、清末まで続けられた。200 余年の長きに亘ることから、系統的かつ完全で依拠しうるものである。

例えば、気象類の雨雪分寸を反映した档案は、毎回降雨降雪の後、雨水が土に染み込んだ深さと積雪の厚さ及び降水の開始終了の日期を記載している。档案の状況から見れば、定量的なもの（「得雨幾寸」）と定性的なもの（「雨水調順」，「俱未沾足」）の両類に大別できる。乾隆4年正月11日、川陝総督查郎阿は「奏報甘省得雪沾足仰慰聖懷摺」の中で、降雪の日期及び降雪量を非常に明確に奏上している：「所属の各地域が陸続と報告してきたところに拠って、甘肅省所属各地域のことを調べましたところでは、（乾隆3年）10月11日に地域により多寡異なる降雪があったが、いまだ潤ってはおりません。12月27,28,29日の3日間、大雪があつてひとしなみに潤し、全省はあまねく7,8寸から1尺2寸が積もりました。田地に積雪が多ければ、地中の養分も豊かになり、春に雪解けしてから播種すれば育ちやすいものでございます。甘肅省の降雪状況は連名で奏摺によって奏上し、聖上にご安心いただきたく存じます。」（録副奏摺 9692-044）。そして乾隆9年5月19日、甘肅巡撫黃廷桂の奏摺は定性類の奏摺に属する。降雨の日期叙述は比較的簡単であり、降雨量は定性的に描出している：「調べましたところ、階州，文県，成県は4月18日以降連日雨水が浸透して、穀物の苗は皆よく育っています。その他全省の州県衛所は4月下旬と5月初旬に適時の慈雨があり、一律に潤いました。」（録副奏摺 9727-058）。

地方官は毎年二回朝廷に対して夏・秋両季の農業収穫を報告したが、これも定量と定性の両類に分けることができる。乾隆2年正月初8日、大学士仍管川陝総督查郎阿が瓜州回民の屯田の収穫指数を報告するために奏した奏摺には、「…詳文の報告によると、瓜州小湾踏実堡などの場所では、京斗で小麦 7600 石を播き、48520 石 3 斗 5 升 4 合を収穫しました。総計で収穫は 6 分 3 厘 8 毫余となりました。本年必要な種初以外、彼等の一年分の食糧は余裕あるものとなり、欣喜雀躍しないものはおりません。小湾では京斗で豌豆 400 石を試みに播きましたが、776 石 9 斗 1 升 4 合を収穫しただけで、総計で 2 分にも及びません。蓋し、長城外側の土地は豌豆に適しておらず、回民が豌豆を必要とする場所も元々多くありません。今回は試みに播いただけで限度がありますから、収穫は少ないと言っても支障はございません。該道は経理，營弁が冊結を作成し終えてから、

再度人員を振り当てて確認しましたので、嘘偽りはございません。」（録副奏摺 9542-001）と言っている。該奏摺内では収穫の指数を報じているだけでなく、播種と収穫の石数までもがはっきりと奏上されている。そして、新作物導入の消息まで内容が及んでいる。乾隆 13 年 10 月 24 日の甘肅巡撫陳弘謀の奏摺は、簡単な定性的な描写に属する：「甘肅では最近雨が降りました。夏になって以来雨水は適度に降っており、夏苗は結実し、現在陸続と収穫しており、所々在々豊作で、秋苗も皆生えてきました。」（録副奏摺 9982-037）。

清代の糧価奏報制度は康熙朝に開始され、各省総督、巡撫、提督、総兵などの高官が報告すべきものとされた。乾隆朝に糧価奏報制度が確立した後は、巡撫が報告するものと改められ、清朝滅亡に至るまで、200 年強続いたのである。乾隆 4 年 4 月 21 日の甘肅提督瞻岱の奏上によると「今甘肅省各所の穀物価格を後記します。米：甘州每京倉石当たり価格は銀 3 両 3 錢 8 分余、肅州は 3 両 1 錢 8 分、涼州は 4 両 1 錢 2 分余、寧夏は 1 両 9 錢 5 分、西寧は 5 両 3 錢 2 分、安西は 3 両 9 錢 9 分余。粟：甘肅每京倉石当たり価格は銀 1 両 7 錢 7 分、肅州は 1 両 9 錢 8 分、涼州は 2 両 9 錢 2 分余、寧夏は 1 両 2 錢、西寧は 2 両 9 錢 6 分、安西は 2 両 2 錢 8 分余。豌豆：甘州每京倉石当たり価格は銀 1 両 3 錢 4 分余、肅州は

1 両 3 錢 2 分、涼州は 2 両 4 錢 7 分余、寧夏は 1 両 5 分、西寧は 2 両 3 錢 1 分、安西は 2 両 2 錢 8 分余。錢価：甘州銀 1 両を大錢 850 文に換える。肅州は 800 文、涼州は 800 文、寧夏は 800 文、西寧は 850 文、安西は 800 文」（録副奏摺 9692-046）とある。

水資源の利用、管理の問題に関しても非常に価値がある。甘肅東部は起伏が比較的大きな黄土高原であり、黄河及びその支流が該地域を貫いており、水利資源が豊富である。西部は河西回廊で、黒河、疏勒河などの内陸河川があり、気候は乾燥しており、沙漠が主となっている。祁連山（甘肅の省内では南山と呼ぶ）の融雪によって灌漑され、片々たるオアシスを形成されている。特殊な地理条件から、水路を開いて引水することは甘肅地域の農業発展の必要条件であり、沙漠地域の人民が生存するための必要条件となっている。「…大通りの両傍は民が耕作している場所であり、土地はなかば痩せ、総てを河流に頼って灌漑を行い、或いは源泉が注ぎ込み或いは山雪が融解すれば、水路を引いて分流させ、壩（ダム）を築いてその流れをセーブするのです。」（録副奏摺 0857-047）但し、「民間の用水は不均等であるという弊害が常にあり、勢力ある者は用水量が甚だ多く、微弱な者は用水量が不足してしまうのです。上流が水を多く消費すれば、下流は灌漑を行えません。事情が軽微ならば互いに告訴しあい、重大ならば殺人事件にまで成ってしまいます。」ここにおいて甘肅巡撫黃廷桂は「水利を管轄する官員及び各地の官員に命じて、用水の際には、必ず自らくまなく査察し、その田地の多寡を計り、用水時間を分別して、一律にあまねく均等に潤すようにさせたのです。報告によれば各々は水路の傍に水の量と時刻を彫りつけて石碑を立て、混乱がないようにさせたとのことです。この 2 年来成文規則があり、民も安んじ、争い事も段々と収まってきています。」（録副奏摺 0813-004）。また「河西の甘州、涼州、肅州一帯の地方は辺境の地で恵みの雨が少なく、祁連山の雪水に総てを頼って水路を開き浚渫し灌漑に役立てています。」ともある。「涼州府の首県である武威県は永、金、懷、雜、大、黄などの 6 渠を穿ち、民田 11600 頃を灌漑しています。うち黄渠上流の笄笄灘地方は雍正 11 年に前総督劉於義の奏

上を経て、涼州鎮の兵丁に牛具、種籽、銀量を貸与して土地を開墾し、軍餉を補給したのです。当時開墾した初めの頃は、山内の樹木は鬱蒼としており、積雪は厚く積もり、渠水はもともと充分でした。笈笈灘が流れを堰き止めて灌漑しても、黄渠の民田は水が不足するなどという憂いはなかったのです。乾隆2年に涼州滿營兵房衙署を修築するのに黄渠源流の樹木を伐採して使用してから、氷雪は多く積もることが出来なくなり、黄渠の水は常に不足に苦しむに至りました。」黄渠の農民は3500余戸で、耕作地は1400余頃であった。笈笈灘が渠水を堰き止めたことは黄渠の民田に不利益となったことから、甘肅巡撫明德は水流を堰き止め耕種することを永遠に停止し、黄渠下流の農地における灌漑の資となし、水不足の患がなからしめるように奏請したのである（録副奏摺0980-014）。上述の史料は2点の重要な状況を説明している。第一は該地区は根本的に水資源が甚だ不足し、矛盾が大きくなるのを防止するために、政府が分水管理を実施し、人民をして「一律にあまねく均等に潤すようにさせた」ことである。政府の安民政策を體現して、軍屯を停止し、民に水を譲ったのであり、政府が自然資源の合理的な利用に関して働きがあったことを意味する。第二は、樹木を伐採して屯田を行うなどの人為が生態環境の破壊現象を惹起し、水資源の不足にまで至ったことである。

牧業類の档案からは、甘肅で多くの軍馬牧場を設立して、大量の軍馬を放牧した外に、甘肅安西地区はもともと羊を産出していなかったが、軍事上の需要によって外地から羊を移入して繁殖・放牧させたことが分かる。乾隆7年10月11日、甘肅巡撫黄廷桂は羊を繁殖させ牧畜を広め軍餉に当てることを奏請する奏摺の中で「安西所属の地域を調べましたところ、沙州赤金以南では水や草が豊富であり、北は湖灘が広がっており、ともに羊、駱駝、馬を放牧することができます。各駐屯地及び回民が随所に牧場を設けるだけでなく、ハミ駐防の官兵が所有する馬や駱駝も前提督樊廷が奏准を経て山南に追い込んで放牧することを毎年常としたので、欠乏の虞れがなくなりました。伏して思いますに、駱駝も羊も繁殖しています。秘かに調査しますに安西道は常に潤うようになりました。該道の稟では、長城の外では元々羊が産出されず、商人が商売をしようと安西に来れば、1匹銀2、3両くらいの値を付けていた、と言っています。…羊肉は本来糧食として配給できますし、今安西において軍餉の需要は甚大であり、支給も容易ではありません、もし水・草が豊富な場所で羊を飼ったならば…非常に役立つことでしょう。」（録副奏摺0976-031）と言っている。乾隆四年、川陝総督鄂弥達も羊を放牧繁殖させることを奏請している：「臣が調べましたところ、安西の赤金と甘州長城外の古仏寺の地では牧場が広く、水・草も良好であり、できるだけ子羊を繁殖させるべきでしょう。予め処理して、内帑銀を賜い人員を任命して牝羊2万匹、種羊2千匹を購入し、数目を確かめて清算し、羊の半数ずつを安西鎮総兵及び甘州提督に交付し、弁兵を派遣して管理させることはかなわないでしょうか。」（録副奏摺0488-032）。軍事上の需要から羊、駱駝、馬を大量に移入する現象は、該地の植生環境に影響を及ぼした筈であり、羊のように何かを導入したという情報は生態研究にとって更に重要であろう。

人口数量に関する档案は存留が非常に不完全である。陝甘総督勒保は奏上した：乾隆40年4月に奉じた上諭では「各督撫は所属に厳命して、爾後実在する民数をきちんと調べて文書で報告し、確認した上で纏めて奏上せよ。」となっています、と。（録副奏摺0291-084）乾隆39年から乾隆58年までの20年間では、11件の具体的に甘肅省の民数

を報告した档案が抽出できただけである。例えば乾隆 58 年 11 月 19 日、陝甘総督勒保が報告している：乾隆 58 年甘肅省蘭州，鞏昌，平涼，慶陽，甘州，涼州，寧夏，西寧の 8 府、秦州，階州，涇州，肅州，安西の 5 直隸州所属の实在民数は男女老幼全体で 15178348 口であり、前年に比して 3661 口増加している（録副奏摺 0767-028）。この類の档案はこの時期のこの地域の人口が安定的な増加傾向を示していることを系統的に反映している。別の角度から見れば、人口変動の状況は兵丁の転入転出を体現している。乾隆 21 年 4 月初 3 日の上諭によれば、「朕は先に満洲人口が日々増加していたことによって、その生計を成り立たせるようにせねばならず、かつ辺境に駐屯させることは有益であることから、満兵 5000 を選抜して安西に駐防させた。」（録副奏摺 0495-009）乾隆 31 年、報告によれば、甘肅省には緑營の騎歩兵丁 48486 名が駐屯していた（録副奏摺 0397-920）。雨雪、糧価の奏報と同様に、毎年的人口数目的報告は制度を形成していた。

このほか、これらの档案は行政管轄権と監督権を具有する陝甘総督，甘肅巡撫，甘肅布政使，甘肅提督のような高級官員、総兵及び欽差や移動中の官員などの奏摺であることから、一般的な状況では、彼等は互いに気を通じることなく各自が皇帝に対して管轄地域内や路上に見聞した重要な事柄を秘密裏に奏上したのであった。よって、これらの奏報の正確さや信頼性は比較的高いものである。但し何事も絶対と言うことはない。乾隆 46 年、露見した甘肅布政使王亶望の貧民救済金横領案件は部分的な史料の価値を割り引かせてしまった。乾隆 39 年から 46 年まで甘肅兩任布政使王亶望，王廷賛は全省の大小官員と通同して災害を捏造して賑災することにして、清代最大の集団汚職事件を起こしたのであった。この期間、甘肅地域における旱害，賑恤，倉庫の備蓄，糧価などに関する一部の史料は事実と符合しないであろうから、使用の際には真偽の判別に注意しなければならない。但しこうしたものは档案史料のごく少数であり、総体的には清代の档案が有する一次性と相対的な客観性は疑うべくもない。歴史の本来の姿を反映し、清代史研究にとって第一級の史料である。

砂塵に関わる問題は、档案において直接的な記載はないが、しかし風砂災害の描写から我々は砂塵の様子を探ることが出来そうである。乾隆 30 年 5 月 18 日、陝甘総督楊昞琚の奏上によれば、「…調べましたところ、鎮番県城の四方は砂が堆積し、大風があれば砂を含んで来るので、東西北の三方は城壁の内外に砂が堆積し、城壁と同じ高さになっています。もし、砂をかきのけて補修したとしても、ひとたび風が起こって砂が舞えば、補修したはなから砂が堆積することになりましょう。…調べましたところ、宣化府城は城内外に積もった砂をすべて掻き退け、城市から 10 丈のところに防砂堤 400 余丈を築き、堤の上と堤の内側にはヤナギを植え風砂を防ぎ、井戸を掘って灌漑に供しました。もう 10 年もたっていますが利をもたらしています。」当時鎮番県城の東西北三面の城壁内外はともに砂が堆積し、城外の三面に防砂堤を築き、堆積した砂を掻き退けたというが、費やしたものは大きかった。「城内東西北三面をそれぞれ 10 余丈後退させ、土城を築いて、旧来の城壁を外堤として、旧城に居住する民戸はもし新城への移住に応ずれば、物資を給して移住させたらよいのではないのでしょうか。このようにすれば、旧城に堆積した砂を城外に掻き出す必要もなく、堤防を建築する必要もありませんし、旧城を補修する必要もありません。これら 3 項の節約を合計すれば非常に大きな額になるでしょう。城市から数丈外にある薄く積もった砂は、昨年冬と今年春に住民に諭告して、食糧を支

援して、徐々に掻き退けさせました。掻き退けた場所にはヤナギを 22000 余株植え、水路を穿って引水灌漑し、土地がやや高く水が行きにくい場所には、井戸 30 余本を掘って汲み上げて灌漑させるようにしました。…現在ヤナギはすでに芽吹き、18600 余株が生きています。数年の内には繁茂して林となり、風が起これ砂が舞ったとしても、ヤナギが揺れ動けば皆落ち着き、将来新城の内外に砂は入って来にくくなるだけでなく、旧城も砂塵が堆積するような場所です。必要な費用も省け、簡単に行えますので、国家財政と人民生活と両者を裨益することでしょう」（録副奏摺 1123-012）。鎮番県は沙漠に埋もれかけた県城であり、人々は生存するために頑強に大自然と闘争し、城市に砂防林を作って風砂の侵入を阻止したのである。この種の有効な方式は、現在に至るまで用いられている。

中国西部地区の生態環境は脆弱で、気候は乾燥し、植生は極めて少なく、土質はもろい。人間社会の不合理な生産活動は、地表の植生と自然の地形を破壊するものである。甘肅巡撫黃廷桂はこの地域の植生が極めて少ないのを見て、大家を招聘して植樹造林させ、現地の荒れ山や禿げ山の様子を変えてしまった。彼は植樹の長所を奏摺で述べている：「恐れながら調べましたところ、植樹は古今行うべきこととございます。道路の傍に植えれば、道を示し、道行く人に木陰を提供し、その眺めをよいものです。山谷の間や田地の傍に植えれば、その土地を豊かにし、物材を供給し、産業に資するものです。ところで、甘肅省の河東一帯では、城の近くにきてようやく樹木に出会います。その他の場所では全く何も生えておらず、ほぼ不毛であります。河西の各地は、山は荒れ、樹木に乏しく、青々しいところがありません。調べましたところ、ニレやヤナギはどこでも生えます。どうして愚民が生計を立てることに於いて切迫してもいないのに、当然得られる利益を粗略にすることがありましようか。親民官には指導の仕方というものがあります。今路傍や家屋の傍、そして山谷や水路の傍、田地の間の空き地といった耕耘を妨げない場所に数株ずつ植え、数年して成長すれば、大きな者は器物に加工できますし、小枝は薪とすることができ、その労はほとんどないのに、その利は行き渡るのです。臣は昨年春初に道・府に檄文を送り、官署を指導し小民を監督して、規定に従い植樹し、誠実に指導を行わせました。稟文では、全省で樹木 62 万余株を植え、また許可なく牛や羊が踏み込むことを厳禁し、成長に便ならしめたと称しています。今春、臣はまた文書で各所屬地域に命令し、昨年の植樹法に遵って、植樹指導を続行させました。このように年々行えば、抛棄された土地からはよい材木を産出し、道においては休憩でき、民用にも利をもたらし、通行人にも便ならしめ、まことに裨益するものです」（録副奏摺 0856-036）。これは当時において、甘肅巡撫黃廷桂のような官員が、一定の環境保護意識を自ら持ち、人と自然の調和を促進するのに一定の貢献をしていたことを明らかに説明するものである。

今次抽出した清代の気象、水利、農業、人口、牧業などに関連した史料は、ともに甘肅地区の生態環境問題研究にとって第一級の史料である。これらの档案は多くの角度、多くのレベルから甘肅地域の 200 年前の生態環境を描き出している。それらは今昔の生態環境を比較することを通して、我々に自然環境の変化を見出させてくれるものである。自然の要素と人為の要素が環境変化に与えた影響を科学的に分析するためにも貴重なデータを提供するものである。総合地球環境学研究所は歴史档案中の大量のデータを

利用して生態環境問題を研究し、新たな視角を開拓し、科学研究を深化させ系統立てることができよう。

現在、中国西部は大開発の経済建設の最中にあり、中央政府と地方政府は適切な措置を採用して、生態建設と環境保護を第一義として、持続的発展の道を歩むことを堅持している。2003 年から甘粛省は千里の河西回廊で 100 万畝の土地での耕作を止め林に戻す工程を実施し、当地の生態環境を改善しようとしている。我々が手を携えて地球の傷を治療することは、子孫に健康的な生活環境を提供するであろう。

加藤雄三 訳（総合地球環境学研究所）